Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, No.4, pp.225-236, 2011
信州大学教育学部研究論集　第 4 号　pp.225-236　2011年

＜翻　訳＞

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXIX) [1]—

茂 木 秀 淳　信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード：善 (śreyas)，王の解脱，家長期の解脱，ナーラダ，アリシュタネーミ

[276 章] ((D.287 章，C.10553-10611，K.293 章)

ユディシュティラは言った。

(1)　もろもろの聖典の真理を知らず，常に疑問をもち，決心のつかない者にとっての善きこと (śreyas)（とは何か）を語るべし，祖父よ。

ビーシュマは言った。

(2)　常なる師匠への礼拝[2]，長老に[3] 近座すること，そして学問の聴聞が，変ることなき[4]善きことであると言われている。

(3)　ここでも人々はこの古譚を例として語る。ガーラバ仙と神仙ナーラダとの対話を。

(4)　ガーラバ仙は，迷妄と疲労を離れ，知識に満足し，感官を制御し，善を欲し，自己を制御した[5]バラモンであるナーラダ仙に言った。

(5)　世間において，また人々の間で[6]，それによって人が尊敬されるさまざまな徳性 (guṇa)，そのすべてが確固として貴方にある (bhavaty anapagān) と私は見ている。

(6)　そのような迷いなき貴方は，長い間迷い，世間の真理を[7]知らぬ我々の疑問を断ち切るべし。

(7)　このように為すべき事と為すべきでない事を知る者には[8]，知識にかなった (jñāne) 行為 (pravṛtti) があろう。我々は何が為すべき事か決めることはできない，それを貴方は語るべし。

---

[1]本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXVIII)—』(信州大学教育学部研究論集第 3 号 2010 年 7 月 pp.165-178) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。

[2]gurupūjā　Cn. gurupūjā, īśvare cetaḥpraṇidhānam / (guru-pūjā とは，自在神に専心することである)

[3]vṛddhānāṃ　Ca. vṛddhānāṃ, jñānavṛddhānām / (vṛddha とは，知識に長じたる者たちである)

[4]kūṭasthaṃ　Ca. kūṭasthaṃ, sanātanaṃ, sarvāśramasya sādhāraṇyam / (kūṭastha とは，常の，ということであり，あらゆ生活期に共通すること，ということである)　Cs. kūṭasthaṃ, pradhānam / (kūṭastha とは，根本物質 (?) である

[5]P. jitātmānaṃ　D.,K.: yatātmānaṃ

[6]P.,K.: nṛṣu　D. mune

[7]lokatattvam　Cn. lokatattvam, ātmayāthātmyam / (lokatattva とは、アートマンのあるべき姿である)

[8]P. kāryākārye vijānataḥ　D.,K.: kāryāṇām aviśeṣataḥ

(8) 尊者よ，生活期（の規定?）は[9]，「これがすぐれている。これがすぐれている。」と様々に広がっているが[10]，すべて，個々の振る舞いを示していない。。

(9) 一方 (tu)，聖典と共に出発した[11]これらの聖典を称賛する人々[12]，そして自らの聖典に満足した人々を[13]見ても，我々は (彼らに) 善きことを見ることはない。

(10) もし聖典が一つであれば，その時には善きことは明らかとなろう。聖典が多いために，善きことはますます洞穴に入ってしまう。

(11) このために善きことは私には混乱して[14]現われる。それ (善きこと) を私に語るべし。私は近座した。おお御身は教示されたし。

ナーラダ仙は言った。

(12) 四種の生活期はそれぞれ正しく構想されている，息子よ。汝は (そのすべてに) 依拠してそのすべてを観察すべし，ガーラヴァ仙よ。

(13) 汝は，それら生活期のそれぞれについて，順次 (tatas tataḥ)，様々に広がった[15]種々の形の徳性 (guṇa) の教えを[16]見るべし。それら (生活期?) が，汝を正しく意図されたもの (abhipretam) に導く[17]のである。このことに疑いはない。

(14) このように生活期の最高の目的 (gati) を正しく見つつ (?)[18]。しかし，正しくこの上なくすぐれたもの (yat) は，疑念なきことを本性としている。

(15) 「友人への好意 (anugraha)，敵の制圧 (nigraha)，そして三種の目的の獲得 (saṃgraha) は，善きことである」と賢者たちは言った。

(16) 悪しき行為の停止，常なる善の性向，そしてよき人々とのよき行為は，善きことである。このことに疑いはない。

(17) あらゆる生き物に対する優しさ，もろもろの行為における (vyavahāreṣu) 正直さ，そして心地よく発せられた言葉は，善きことである。このことに疑いはない。

---

[9] āśramāḥ　Cn. āśramāḥ / nāsti śramo 'nuṣṭhānajo yasminn ity āśramaṃ jñānam / tasyeme sādhakā āśramāḥ, śāstrāṇi / (āśrama とは、そこにおいては実行より生じた疲労がないものであり、知識である。知識にとってこれら生活期は達成手段である。すなわち生活期は聖典である)

[10] P. nānāpradhāvita　D.,K.: sarve prabodhitāḥ

[11] viprasthitān　Cs. viprasthitān, vividhamārgaprasthitān / (viprasthita とは，さまざまな道を進む，ということである)

[12] śāstrābhinandinaḥ　Cn. śāstrābhinandinaḥ, sve sve śāstre abhinanditum śīlaṃ yeṣāṃ tān / (śāstrābhinandin とは，それぞれの聖典に満足する傾向のある人々である)

[13] P. parituṣṭāṃś ca　D.,K.: parituṣṭāś ca

[14] P.,D.: kalilaṃ　K. gahanaṃ　Cn. kalilaṃ, nānāśaṅkākulam / (kalila とは，さまざまな疑問の集積である)

[15] viprasthitaṃ　Cn. viprasthitaṃ, pṛthagviruddhena prakāreṇa prasthitam /(viprasthita とは，個々には対立する種類として存在している、ということである)

[16] P.,D.: nānārūpaguṇoddeśaṃ　K. nānārūpaṃ guṇoddeśaṃ

[17] P. nayanti　D.,K.: na yānti

[18] P. ṛju paśyan　D.,K.: anye (')paśyan　paśの主語は前節からのものか。

(18) 神々，祖先，そして賓客への食べ物の分与，そして被養者 (bhṛtyānāṃ使用人) を見捨てぬことは，善きことである。このことに疑いない。

(19) 真実の言葉は善きことである。真実を知ることは為すに難かしい。生き物の最終的な幸福であるものを，余は真実と言うのである。

(20) 自我意識の棄却，願望の[19]制圧 (nigraha)，満足，単独行[20]，そして不動心 (kūṭastha) は，善きことであると言われる。

(21) 規範にかなった (dharmeṇa) ヴェーダ学習，そしてヴェーダ支学[21]の（学習）、そしてもろもろの学問の目的 (?) を知らんと欲することは[22]，善きことであることは疑いない。

(22) 善きことを求める者は，音声，色形，味，触感を，香りも含め，それだけのために (kevalān) 過度に求めるべきではない，敵を苦しめる者よ[23]。

(23) 夜の徘徊，昼間の睡眠，安逸，中傷，酩酊，過度のヨーガとヨーガの非実行[24]，善きことを求める者はこれらを捨て去るべし。

(24) 他人を批判することで，(自分の) 行為を引き上げることを[25]求めてはならない。自分の徳性のみによって，凡夫 (の状態) から (pṛthakjanāt) 離れることを求めるべし。

(25) 徳なき人々は，しかし，ますます自分を高く評価し[26]，もろもろの誤りによって自分の徳性が滅すると[27]，他の徳ある者を非難するのである[28]。

(26) 彼らはしかし，何も言われないので[29]，自らのうぬぼれによってうぬぼれて，自分を偉大な人よりも高い徳の持主と考えるのである。

---

[19] P. praṇayasya D.,K.: pramādasya

[20] ekacaryā Cp. ekacaryā, ekākitvenāvasthānam / (「単独行」とは、孤独に住むことである)

[21] P.,K.: vedāṅgānāṃ D. vedāntānāṃ

[22] P. vidyārthānāṃ ca jijñāsā D.,K.: jñānārthānāṃ jijñāsā ここでの artha の意味は限定できず、いくつかの解釈が可能である。 Ganguli: and all enquiries and pursuits having for their sake the acquisition of knowledge Deussen: und auf die Erkenntnis abzweckende Forschung 中村 [2000]: 知をめざす探求

[23] P. paraṃtapa D.,K.: kathaṃcana

[24] atiyogam ayogaṃ Ca. atiyogam / atiśayena yogaḥ prāṇāyāmādir vātagulmamehādivyādhidvārā yogaḥ vigraharūpa eva / (atiyoga とは，過度なヨーガのことで、呼吸の制御などが、風・樹木・尿などの病気を通じて実行される（yoga)，というのが（合成語の）分解の形である） Cp. atiyogaṃ, prāṇāyāmāder atyantasevanam， viṣaye vātyantāsaktim / （atiyoga とは，呼吸の抑制などの極端な実行、あるいは、対象への過度な執着である） Cs. atiyogaṃ，karmasv atiprasaktiḥ / ayogaṃ, karmakaraṇebhyo nivṛttiḥ /(atiyoga とは、行為に過度に執着することである。ayoga とは、行為の実行の停止である） N. atiyogam āhārādīnām /(atiyoga とは、食事などの（過度の実行である）

[25] P. karmotkarṣaṃ D.,K.: ātmotkarṣaṃ

[26] P. ātmasaṃbhāvino D.,K.: ātmasaṃbhāvitā

[27] ātmaguṇakṣayāt Cn. ātmano guṇāḥ，kṣayaḥ aiśvaryam， tadubhayāt / guṇakṣayād iti samāhāraḥ / (自分のもろもろの属性（guṇa)、kṣaya すなわち力、その両者によって、すなわち「属性と力によって」、ということである）
N. は kṣaya を「力」と解し、徳ある人々を非難する手段とみなしている。

[28] kṣipanti N. kṣipanti nindanti / （kṣipanti とは，非難する、という意味である）

[29] P. anucyamānāś ca punas D.,K.: anūcyamānāś tu punas Cv. gloss: anukūlatayā ucyamānāḥ / (好意的に言われると)

(27) いかなる人の非難も口にせず，自分を称えることも言わずして (=MBh.III.198.47ab)，徳を備えた賢者は，大きな名声 (yaśas) を獲得する。(Cf.MBh.III.198.47)[30]

(28) 花の清浄なよい香りは，語ることなく香り (vāti)，同様に太陽は，言葉を発することなく，翳りなく (vimala) 天に輝く (bhāti) のである。

(29) これらを始めとして，英知によって（うぬぼれを?）捨てた者たちは (parityaktāni medhayā)，この世界で光輝によって輝くのであるが，言葉を発することはない。

(30) 愚か者は，自分だけを称賛するので，世間で輝くことはない。学問を完成した人は (kṛtavidyaḥ)，洞穴の中に隠されても[31](世間で) 輝くのである。(Cf.MBh.III.198.46)

(31) 悪しき[32]言葉は声高に発せられても消えてしまうが，善き言葉は静かに (発せられても) 世間に輝くのである。

(32) 愚かで傲慢な人々の多くの実のない言葉は，その人の内部 (antarātmānaṃ) を見せる。太陽が昼間姿を[33]見せるのと同様に。

(33) この理由から人々は種々の英知 (prajñā) を一心に求めるべきである。なぜならば，余には，英知の獲得は生き物にとって至上のことと見えるからである。

(34) 質問されなければ[34]誰にも語るべきではない。そして不作法に (anyāyena) 問う者に対しても (語るべきではない)。賢者は，知識があっても[35]，愚者のごとく世間では振る舞うべし[36]。(Manu 2.110, Bötlingk [Indische Sprüche] No.3594)

(35) そして，ダルマを常とするよき人々の間に，そして寛大にして自分の義務に満足する人々の間に，住む家を見つけるべし。

(36) 四種の種姓の規定 (dharma) が混乱しているようなところには，善きことをを求める者は決して住んではならない。

(37) この世では，行為することなく，獲得した糧に従って生活すべし。(人は) 善き人々の間では汚れなき善を獲得し，悪しき人々の間では悪を得るであろう。

---

[30] この詩節 (MBh.III.198.47) は cd 句の意味が反対である。「何人を非難することもなく，自賛するすることもなく。この世で、有徳の人が有名であるとは限りません。」(上村勝彦『原典訳マハーバーラタ』4, pp.100-101 ちくま学芸文庫 2002)

[31] api cāpihitaḥ śvabhre　Cs. apihitaḥ śvabhre, garte tiraskṛtaḥ / (apihitaḥ 'svabhre とは、穴の中に隠された、という意味である)

[32] P. asann　D.,K.: asad

[33] P. divā rūpam　D.,K.: agnirūpam　Cn.(reading agnirūpam) yathā sūryaḥ sūryakāntayogāt svasyāgnirūpaṃ darśayati, evaṃ kṣudro 'pi kuśabdayogāt kṣudram antarātmānaṃ darśayatīty arthaḥ /(太陽が、日長石と結びつくことによって，自らの火の姿を見せるように，悪しき者 (kṣudra) も、「悪しき (ku)」という語と結びつくことによって，悪すなわち内的自己を見せるのである

[34] nāpṛṣṭaḥ　Apte は āpṛṣṭa の意味として Asked for を示し，この箇所を用例として挙げている。

[35] P.,D.: jñānavān api　K. jānann pi ca

[36] P. jaḍaval lokam ācaret　D.,K.: jaḍavat samupāviśet

(38) 水の一滴，そして火の粉から (水や火との) 接触を感じる。我々は善と悪の両者との接触を，それと同様なものと観察する[37]。

(39) 残り物を食べる人は，食べる対象を[38]見ずに食べる。食べ物を食べる者は[39]行為の領域 (viṣaya) にいると知るべし (?)。

(40) 伝承を望みつつも[40]不作法に質問する者たちに対して，バラモンがダルマを説明するようなところ，賢者は (ātmavān) そのようなところを去るべし。

(41) 弟子と師匠のあり方がよく整い，正しく聖典にかなっているようなところ，そのようなところを誰が去るであろう。

(42) 拠り所をもたず[41]，自分の尊敬を求める者たちが (ātmapūjābhikāmāḥ)，常に学識ある人々の欠点を話すようなところ，そのようなところにいかなる賢者が住むであろう。

(43) 貪欲の人々によってほとんどダルマの堰が壊された所，そのようなところは，火のついた山の裾野のように[42]，誰が去らないことがあろう。

(44) ダルマに対する疑念なく嫉妬を滅した人々が (ダルマを) 実行しているようなところへ行き，清浄なよき人々の間に住むべし (=MBh.XII.276.53cd)。

(45) 人々が利益のためにダルマを行うところでは，彼らと共に住むべきではない (na tān (=mānava) anuvaset)。なぜならば彼らは悪をなす者たちであるから。

(46) 生計を立てることを願って (jīvitepsavaḥ)，人々が悪しき行為によって生活している (vartante) ところからは，すぐに逃げるべし。蛇のいる家から (逃げるように)。

---

[37] この比喩の趣旨は、ほんのわずかの量の接触によって本体との接触がある、ということか。

[38] P. 'nnaviṣayaṃ　D. 'nuviṣayaṃ　K. 'nyaviṣayaṃ　Cn. (reading anuviṣayam) viṣayaṃ viṣayam anuvartata ity avuviṣayo rasaḥ / tam apaśyantaḥ, idaṃ madhuram idaṃ tiktam ity anālocayantaḥ /(anuviṣyam とは，対象ごとに存在するもので味のことである。それを見ることなくとは，これは甘い、これは苦いというようにみなすことなしに、という意味である)　Cp. anuviṣayaṃ prativiṣayam — asya viṣayasyāyaṃ rasaḥ, viṣayasyāyaṃ rasaḥ, iti vyaktibhedam anālocayantaḥ / (anuviṣayam とはものごとにという意味である。このものにはこの味、このものにはこの味というように個々の相違を見ることなく、という意味である)

[39] P. bhuñjānaṃ cānnaviṣayān　D. bhuñjānaṃ cātmaviṣayān　K. bhuñjānaś cānyaviṣayān　Ca. annaviṣayaṃ rasādy apaśyann anādarād anālocayan yo bhuñjānaḥ sa vighasāśi[?śa]na iva śreṣṭhaḥ / arthaviṣayāṃs tu nirūpya bhuñjāno viṣayān iva karmaṇā vāgādīn āpnotīti viddhi / (annaviṣaya(食の対象、食べ物) とは，味などである。それを見ることなく，とは、無関心の故に観察することはなく，という意味であり，そのようにする者は，残り物を食べる人のごとくに、すぐれているという意味である。個々のもの (artha-viṣaya) を見てものを食べる者は，あたかも行為によって言葉などの対象を得るがごとく (対象を得る) と知るべし)

[40] yatrāgamayamānānām　Cn. āgamaṃ pramāṇajaṃ jñānam ātmana icchatām, āgamayamānānām/ kyajantasya rūpam / (āgama すなわち基準より生じたアートマンの知識を願う者たちがāgamayamānā であり、彼らに対してという意味である。願望をあらわす名詞接尾辞 (kyac–ya) を終わりにもつ形である)　Cp. āgamayamānānāṃ, subāhyam eva pramāṇīkurvatām /　(外部を (? subāhyam) 基準とする者たちに対して)　Cs. āgamayamānānāṃ, avagamaṃ kurvatām, jñātum icchatām /　(近接する者たち、知らんと欲する者たちに対して)

[41] ākāśasthā　Ca. ākāśasthāḥ devatāḥ / (ākāśastha 虚空に住する者とは，神々である)　Cn. ākāśasthāḥ, nirālambanāḥ /　(ākāśasthā とは，拠り所がない者たちである)

[42] P. pradīptam iva śailāntaṃ　D. pradīptam iva cailāntaṃ　K. pradīptam iva celāntaṃ

(47) ある行為によって，病床につき[43]後悔する[44]ようであれば，自分の繁栄 (bhava) を望む者は，最初からその行為をしてはならない。(Cf.MBh.V.39.27)[45]

(48) 王と王の側近の家臣とが[46]，(客として来た?) 親族たちよりも[47]先に食べるような国を賢者は (ātmavān) 捨てるべし。

(49) しかし，常にダルマに専心し,，祭式とヴェーダの教授を行っているバラモンたちが，最初に食事するような国には居住すべし。

(50) スヴァーハー，スヴァダー，ヴァシャットという発声が正しく行われ，絶えず存在している所には，ためらくことなく住むべし。

(51) 生活に困窮した清浄ならぬバラモンを見るような国は捨てるべし。近くに投げ捨てられた肉を捨てるように[48]。

(52) 人々が求められなくとも喜んで与えるような所に，健全な心をもつ者 (svasthacitta) は住むべし。なすべき事をなした賢者[49]が住むがごとく。

(53) 無作法の者には罰，完成した自己をもつ者には尊敬があるようなところに行き，そして徳あるよき人々の間に住むべし。(CfMBh.XII.276.44cd)

(54) 愚かな人 (?)[50]，制御できない人，行い悪しき人，善からぬ人[51]，抑制なき人，貪欲な人には，極めて大きな罰が保持されており，

(55) 王がダルマを常とし，国を尊重し[52]，欲望をすて，欲望を制するようなところに，(人は) ためらうことなく住むべし。

---

[43]khaṭvāṃ samārūḍhaḥ Ca. khaṭvāṃ samārūḍhaḥ, jarasā vikalaḥ / (khaṭvāṃ samārūḍha とは，老齢によって弱くなった，という意味である) Cn. tīvraduḥkhagrastaḥ / ((khaṭvāṃ samārūḍha とは) 激しい苦痛に苛まれた，という意味である) Cp. pramattaḥ / (酔った，という意味である) Cs. nidritaḥ / (眠った，という意味である) Cv. (reading khaṅgaṃ for khaṭvāṃ) yena puruṣeṇa āditaḥ khaṅgaṃ, khaṅgavasthitaṃ vairaṃ samārūḍhaṃ, manasi nihitam / karmaṇā anuśayī, anukūlaḥ / tadīdṛśaṃ gūḍhakapaṭaṃ na kartavyam / (ある人によって最初に刀，すなわち刀のように存在する力が得られた，すなわち心に貯えられた。行為に従う，とは，従順なことである (?)。そのような (刀のような心で従順に振舞うという?) 隠された偽り (kapaṭa) は為すべきではない)

[44]anuśayī Ca. paścāt tāpānvitaḥ / (後で苦しみを伴う)

[45]yena khaṭvāṃ samārūḍhaḥ paritapyeta karmaṇā /
ādāv eva na tat kuryād adhruve jīivite sati // MBh.V.39.27
(後で寝台に昇って苦しむような行為はなすべきではない。人生は不確実であるから。(上村勝彦『原典訳マハーバーラタ』 5, p.148))

[46]puruṣāḥ pratyanantarāḥ Ca. pratyanantarāḥ, sadṛśāḥ / (王によく似た人々) Cv. pratigṛhaṃ antaraṃ, antargṛham iti śaṅkā nāsti yeṣāṃ te pratyanantarāḥ / (praty-an-antara とは，家ごとの内部，家の中という疑問をもたない者たちのことでる)

[47]kuṭumbinām Ganguli: before feeding their relatives (when the latter came as guests)

[48]upasṛṣṭam ivāmiṣam Ca. upasṛṣṭam, caṇḍālādisparśaduuṣitam / (upasdṛṣṭa とは，チャンダーラなどとの接触によって汚れた，という意味である) N. upasṛṣṭaṃ saviṣam / (upasṛṣṭa とは，毒を含むという意味である) Ganguli like poisoned meat Deussen: wie einen nahen, vorgehaltenen Köder

[49]kṛtakṛtya ivātmavān N. ātmavān jitacittaḥ / (ātmavān とは，心を制御した者である)

[50]upasṛṣṭeṣu Ca. upasṛṣṭeṣu upahatabuddhiṣu / (upasṛṣṭa とは、知性の損なわれた人々のことである)

[51]P. upasṛṣṭeṣv adānteṣu durācāreṣv asādhuṣu D.,K.: upasṛṣṭeṣu dānteṣu durācāreṣu sādhuṣu

[52]P. rājyaṃ vai paryupāsitā D.,K.: rājyaṃ dharmeṇa pālayet

(56) なぜならそのような性格をもつ諸々の王は，国の住人 (viṣaya-vāsin) すべてを，善きことが去ったとしても[53]，すぐに善きことに結びつけるからである。

(57) 汝の問いに対し，私は，善きことをこのように示した。なぜならば自分の善きことを，主なものとして (pradhānena) 考えることはできないからである (?)[54]。

(58) このように，苦行によって心を集中して振る舞いを為す者には，この世で，多くの善きことが顕われるであろう。

[277 章] (D.288 章，C.10612-10658，K.294 章)

ユディシュティラは言った。

(1) 一体どうして我々のような王は，解脱して地上を行くべきなのか。またどのような徳をもてば，永遠に執着の綱から解放されるのか。

ビーシュマは言った。

(2) 私は，ここで汝に，古譚を語るであろう[55]。質問するサガラ王に対してアリシュタネーミ仙によって[56]語られた話を。

サガラ王は言った。

(3) バラモンよ，人は，いかなる最高の善を為した後，この世で安楽を得るのか。どうすれば人は，悲しむこともなく，動揺することもないのか。それを私は知りたい。

ビーシュマは言った。

(4) このように言われて，あらゆる聖典に通暁した[57]アリシュタネーミ仙は，至上の幸福を知っていたので[58]，次のような真実の言葉を語った。

---

[53] śreyasi pratyupasthite　N. pratyupasthite pratīpatvenopastithite hīyamāne satīty arthaḥ /　Apte は，この語の意味として，三番目に 'gone against,　standing opposite to' を挙げ，この箇所を例として引いている。

[54] na hi śakyaṃ pradhānena śreyaḥ saṃkhyātum ātmanaḥ /　pradhānena とātmanaḥの関係について，ここでは，「自分の善が特にすぐれているのではなく，世の中には種々の善がある」と理解した。しかし，ātman が「自分の」ではなく「霊魂の」の意味であれば，「アートマンにとっての善すべてを挙げるのは不可能であるから」，あるいは，「アートマンの善を概括的に述べるのは不可能であるから」(Deussen) とも理解することができる。

[55] P. vartayiṣyāmi itihāsaṃ (sandhi irregular)　D.,K.: vartayiṣye 'ham itihāsaṃ　D.,K. は P. のような不規則な sandhi を回避している。

[56] ariṣṭaneminā　Ca. tārkṣyanāmno muner apatyaṃ, sa evāriṣṭanemis tārkṣyaḥ / (タールクシュヤという名の尊者の息子がアリシュタネーミ・タールクシュヤである)　Cs. tārkṣya iti kaśyāpasya nāmāntaram / (アリシュタネーミはタールクシュヤといい、カーシュヤパ仙の別名である)　Cv. ariṣṭanemir garuḍaḥ — ariṣṭanemiṃ pṛthanājam āśuṃ svastaye tārkṣyam ihā huvema (RV. 10.178.1cd) iti śruteḥ / (アリシュタネーミとは，ガルーダ鳥である。「完全なる車もうを有し (ariṣṭa-nemi)，戦闘に駆らるる駿足・タールクシアを，われら願わくは，安寧のためにここに呼ばんことを」(RV.10.178.1cd 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫 p.215) と天啓聖典に説かれているから

[57] P. sarvaśāstraviśāradaḥ　D.,K.: sarvaśāstravidāṃ varaḥ

[58] vibudhya saṃpadaṃ cāgryāṃ　Ca. agryāṃ, mokṣāvasthālabhyām / (agrya とは，解脱の状態を獲得可能な，という意味である)　Cs. mokṣajanyasukham / ((agrya とは) 解脱によって生ずべき安楽である)

(5) 解脱の安楽がこの世での安楽である。息子と家畜に執着し，お金と穀物を蓄えた世間の人は[59]，これに至ることはない[60]。

(6) 心は執着し，寂静ならざる自我をもつ者は，治癒を願うことはできない。愛着の縄に繋がれた愚か者は，解脱にはふさわしくない。

(7) 愛着より生じたこの世での束縛の縄を語るであろう。それを私から (mama) 聞くべし。(それらは聞く) 耳をそなえた頭によって[61]，賢者によって断つことができる[62]。

(8) 適当な時に (kālena) 息子をもうけ[63]，若いときに妻をとらしめ[64]生計を得るもろもろの能力を知ったならば，(彼らから) 解放され，心のままに (yathāsukham) 遊行すべし。

(9) 息子をもち息子を可愛がる愛する妻が年老いたのを知ったならば，汝は，最高の目的を[65]考慮して，時を選んで (kālena) 妻を捨てるべし。

(10) 汝は，感官によって感官の対象を適切に (yathāvidhi) 享受した後で，子どもがいても，いなくとも，解脱して，心のままに遊行すべし。

(11) 彼ら (家族？) に対する関心が尽きたならば[66]，解放されて，心のままに遊行すべし。たまたま得た獲得物に対して[67]無関心であるべし (samo bhava)。

---

[59] P. loko D.,K.: mūḍho

[60] この詩節から、解脱 mokṣa に関する種々の描写が続く。Hopkins は，ヨーガ行者の目的を論じ、その一つに解脱を挙げているが，解脱の描写に関して、この章に言及し，この章の解脱の特徴を次のように指摘している。(Hopkins[Great Epic] p.107, fn.2)

The chapter xii, 289(=P.277), shows that mokṣa may be simply isolation or independence and does not necessarily connote absorption.

ヨーガの発展した段階では，ヨーガの目標は，超能力の獲得から解脱へと移行するが，解脱の前提となるのは、精神集中や瞑想である。この章の特徴は，精神集中などへの言及なく，世間的価値から自由になることが解脱である，と主張している点にある。それは解脱を求めるのが、王や家長期にあるバラモンであるため，日常的行為を離れることなく、日常的行為そのものを捉え直すところに解脱を想定したためであろう。

[61] sakarṇakena śirasā Ca.,Cp.: sakarṇakena，avadhānapūrvakaṃ śuśrūṣuṇā śirasā /(sakarṇaka とは，注意して聞かんと欲する頭によって，という意味である) Cn. sāvadhāne jīvatā / ((sakarṇaka とは) 注意深く生活するものによって，という意味である) Cs. apadeśaśravaṇayuktaśrotrasahitena śirasā / (教えを聞くことのできる耳を伴った頭によって)

[62] P.,K.: śakyāś chettuṃ D. śakyāḥ śrotuṃ

[63] saṃbhāvya Ca. saṃbhāvya, arthavidyaadinaa yojayitvaa / (saṃbhāvya とは，実利の学問などを身につけさせて，という意味である)

[64] niveśya Ca.,Cp.: vivāhya / (結婚させて) Cn. dāraiḥ saṃyojya / (妻と結びつけて)

[65] parārtham Cn. parārthaṃ, antimaṃ puruṣārthaṃ, mokṣam /(最高の目的とは，最終的な人の目的であり，解脱である)

[66] kṛtakautūhalas Ca. kṛtakautūhalaḥ, bhuktabhogaḥ / (kṛtakautūhala とは，享楽を享受したならば，という意味である) Cn. cchinnotsukyaḥ / kṛ hiṃsāyāṃ bhvādis tasya niṣṭhāyāṃ kṛtam iti rūpam / ((kṛtakautūhalaḥとは) 願望を断ち切った，という意味である)) Cs. kṛtakautūhalaḥ, akṛtānveṣaṇaḥ / yathā bhokteṣu kutūhalābhāvaḥ kartuṃ śakyaḥ, nābhukteṣu tathā / tasmād bhukteṣu bhuktvā kutūhalaṃ muñca / (kṛtakautūhala とは，追求が終わっていない，という意味である。すでに享受したものに対しては関心がないことは為すことができるようには，未だ享受していないものにおいてはできない。従って、享楽の対象を享受した後に，関心を放擲すべし)

[67] P.: upapattyopalabdheṣu lābheṣu D.,K.: upapattyopalabhdheṣu lokeṣu Cs. upapattyopalabhdeṣu, yadṛcchayā prāpteṣu / (upapattyopalabdheṣu とは，偶然に獲得したものに対して，という意味である)

(12)　余はまずはこのように簡潔に汝に対して解脱の意味を[68]説いた。さらに詳細に説くであろう。それを聞くべし。

(13)　解脱し[69]，この世での恐れを離れた人々は，安楽をもって遊行する。執着した心をもつ人々は[70]滅する。この点について疑いはない。

(14)　虫や蟻のように食事を蓄積する人々も[71]，(滅する)。この世に執着しない人々は安楽をもち，執着する人々は滅するのである。

(15)　親族に対して,「この者たちは，私と離れてどのようにやっていくのであろうか」といった汝の配慮は，解脱の意識からは (mokṣabuddhinā)，為されるべきではない。

(16)　人は，自ら生れ，自ら成長し，自ら楽苦に至り，そして死にも自ら至るのである。

(17)　(人は) 食事から衣服まで，そして両親が得た物 (saṃgraha 保護?) も，自ら為したことによって得るのである。世間には以前為されなかったものは存在しない。

(18)　すべての生き物は，創造者によって食べ物を定められ，自分の (前世の) 行為によって護られて，この世で地上を走り回るのである。

(19)　自ら土くれ (のごとき者) となり[72]，常に他人に依存する，確固とした自己をもたない者にとって[73]，自分の親族を養うための[74]，あるいは護るためのいかなる手立て (hetu) があろうか。

(20)　(死を回避するための) 大きな努力がなされても，汝が見ているところで[75]死神が親族を殺すとき，そこで自ら悟るべし。

(21)　この者 (親族) が生きていても，扶養や保護が完了しない場合には，汝は後に残して死ぬことになろう。

(22)　汝が死んで，親族が[76]安楽であるか，苦しんでいるか全くわからない時[77]，まさに (nanu) 自分で悟るべし。

---

[68] mokṣārtho　「解脱という目的を」か。　N. mokṣārtho mokṣaprayojanaḥ / (mokṣārtha とは，解脱の目的である)

[69] muktā(ḥ)　N. muktā chinnasnehapāśāḥ / (mukta とは，愛着の綱を断ち切った者である)

[70] saktabhāvā　N. saktabhāvāḥ viṣayāsaktacittāḥ /(saktabhāva とは，対象に執着しない心をもった者を意味する)

[71] P.,D. āhārasaṃcayāś caiva tathā kītapipīlikāḥ　K. āhārasaṃcaye saktā yathā kītapipīlikāḥ

[72] mṛtpiṇḍabhūtasya　Cs. mṛtpiṇḍabhūtasya, mṛtpiṇḍavat svayam akiṃcitkarasya / (mṛtpiṇḍabhūta とは，土くれのごとく、自分では価値あることを何もしない者，という意味である)

[73] adṛḍhātmanaḥ　Cs. adṛḍhātmanaḥ, asthiraśarīrasya / (adṛḍhātman とは，安定した身体をもたない者，という意味である)

[74] P.,D.: poṣṭuṃ　K. dveṣṭuṃ

[75] P.,D.: tava paśyataḥ　K. bhuvi paśyataḥ

[76] P. yadā mṛtaś ca svajanaṃ　D.,K.: yadā mṛtṃ ca svajanaṃ　D.,K. では,「死んだ親族が安楽であるか，苦しんでいるかわからない時」となるが，この方がわかりやすい。

[77] P.,K.: na jñāsyasi kathaṃcana　D. na jñāsyasi kadācana

(23) 汝が死んでいるにせよ，生きているにせよ，親族は (jana) 将来自分の行ったことを享受するのであれば，(汝は) まさにそのことを (evam) 認識して，自分にとっての善きこと (hita) をなすべきである。

(24) このように知って，「この世では，誰も誰のものでもない (kaḥ kasya)」と確信して，心を (manas) 解脱へと向かわせるべし。そして，さらに聞くべし。

(25) この世で，ある者の (dehinaḥ)，飢えと渇きなどの状態が抑制されているならば,，そして怒り，貪欲，迷盲 (が抑制されているならば)，その者は，真実をもち (?)[78]，まさしく解脱した者である。

(26) 賭事・飲酒・女・狩に，迷盲の故に耽ることがなければ，その者は常に解脱した者である。

(27) 「一体，毎日毎日，そして，毎夜毎夜，いつもいつも[79]，食べねばならぬのか」と苦しむ者は，(人の) 欠陥を知る人 (doṣabuddhiḥ) と言われる。

(28) 自分の心は[80]，女から解放されている[81]と，何度も見る常に注意深い[82]者は，まさしく解脱した者である。

(29) 生き物の，誕生と死滅，そして活動を正しく (tattvato) 知る者は，まさしくこの世において解脱した者である。

(30) 千の，そして一億の荷車において[83]，生きるために (yātrārthaṃ)，(わずか) 1 プラスタ (の穀物) を見る者，宮殿を[84](寝るだけの) 寝台と見る者，その者は解脱している。

(31) この世界を，死に襲われ，病気に苦しめられ，貧窮によってやつれさせられるものと見る者は，解脱している。

---

[78]sattvavān N. sattvavān sattvādhikaḥ / (sattvavat とは，真実の増大した，という意味である) Ganguli: That man of firm Soul Deussen: besitzt das Sattvam

[79]P. sadā sadā D.,K.: pumān sadā

[80]ātmabhāvaṃ N. ātmabhāvaṃ cittasya svabhāvaṃ / (ātmabhāva とは，心の本性を意味している)

[81]P.,D.: strīṣu muktam eva K. strīṣu saktam eva N. muktaṃ stryabhilāṣād vyāvṛttaṃ / saktam iti pāṭhe saktaṃ saṃgas taṃ bhāve niṣṭhā ātmano bhavanaṃ bhāvo janma strīsaṃgaṃ janmahetutvena yaḥ paśyatīty arthaḥ / (mukta とは，女に対する愛情を離れている，という意味である。sakta と読む場合には，sakta とは合一である。それ (合一) を存在における基盤，存在とはアートマンの発生，すなわち誕生であり，したがって，女との合一を誕生の原因と見る者は，という意味である)

[82]sadā yukto N. yuktaḥ sāvadhānaḥ / (yukta とは，注意を伴っている，という意味である)

[83]vāhasahasreṣu yātrārthaṃ caiva koṭiṣu Cn. vāhaḥ, dhānyapūrṇaśakaṭaḥ / prasthaṃ, puruṣāhāraparimitaṃ dhānyam / (荷車とは，穀物を満載した荷車。プラスタとは，一人の人の食料に限定された穀物のことである) Cv. vāhasahasreṣu preṣyamāṇeṣu satsu patitataṇḍuladinā svasya prasthaṃ yaḥ paśyet / (千台の荷車が行くときに，落ちた穀粒などによって自分にとってはそれを 1 プラスタと見るような者、その者は) Cs. aśvādiyānakoṭiṣu svasya yātrārthaṃ gamanamātraprayojanam ekayānaṃ ca yaḥ paśyati / (馬など千の乗物があるところで，自分が行くために，すなわち，行くことのみを目的として，一台の乗物を見るような者、その者は) Cv. (vastrārthaṃ instead of yātrārthaṃ) koṭiṣu jīrṇapaṭakhaṇḍeṣu vastrārthaṃ vastraprayojanaṃ yaḥ paśyet / (一億の古い布切れがあるところで，ただ衣のために，すなわち衣を目的として，見るような者は)

[84]prāsāde Ca. śatahastacaturasre prasāde caturhastamātram eva mamopayogi / (四方が十万腕尺の宮殿において、四腕尺のみが私の入り用)

(32)　(世界をそのように) 見る者は，安楽をもち満足する[85]。(そのように) 見ない者は[86]，破滅する (vihanyate)。そしてまた，この世でわずかのもので満足する者は，解脱している。

(33)　この世の一切はアグニとソーマであると見る者[87]，そして不可思議なものごとによって心動かされぬ[88]者，その者は解脱している。

(34)　ある人にとって，寝台 (paryaṅkaśayyā) と地面が等しいものであり，そして米と悪しき食べ物とが[89]等しいものであるようならば，その者はまさしく解脱している。

(35)　ある人にとって，麻の衣とクシャ草の衣，絹の衣と木の皮の衣，そして羊毛の衣と獣皮の衣が等しいならば，その者はまさしく解脱している。

(36)　この世界をすべて五元素から出来ていると観察する人[90]，そしてそのように観察してこの世界で行動する者は，まさしく解脱している。

(37)　ある人にとって，楽と苦，獲得と損失，勝利と敗北，願望と嫌悪，恐怖と安穏 (?udvega) とが[91]等しいならば，その者は完全に解脱している。

(38)　この身体を血と尿と糞という悪しき物の[92]集積であり，多くの悪しき物からなると見るならば (dṛṣṭvā)，その者は解脱している。

(39)　(この身体を) 老齢によって，皺と白髪が生じ，やせ細り色変わり，腰が曲がるものと見る者は解脱している。

---

[85] yaḥ paśyati sukhī tuṣṭo　D.,K.: yaḥ paśyati sa saṃtuṣṭo　D.,K. は yaḥ paśyati の yaḥに対応する sa を明示している。

[86] napaśyaṃś ca　Cn. napaśyan ity ekaṃ padam / (napaśyan は一語である)

[87] agnīṣomāv idaṃ sarvam　Ca.　yac charīradhāraṇādikāraṇaṃ tad agniṣomāv eva, kṣudhādibodhe puṣṭyādihetutvāt / (体の維持などの原因は，アグニとソーマである。puṣṭi などの原因であるから)　Cn. agnir jāṭharo bhoktā, somo 'nnaṃ bhojyam / (アグニは腹の中にいる享受者である，ソーマは食べ物であり被享受者である)　Cs. agniśabdo jīvavacanaḥ, nānāvidhā yonīr gacchatīti kṛtvā / somaśabdaḥ prakṛtivacanaḥ, sarvaṃ sūyate iti kṛtvā / tathā cānugītāsu– yatra tad brahma nirdvandvaṃ yatra somaḥ sahāgninā / vyavāyaṃ kurute nityaṃ dhīro bhūtvā ni[bhūtāni]dhārayan / (MBh(D.).14.20.10) iti / yatreti hṛdayaṃ parāmṛśyate / idaṃ sarvaṃ prāṇijātam agniṣomāv iti yaḥ paśyati, prakṛtipuruṣamayyaṃ yaḥ paśyati / (多数の母胎に赴くと考えて，アグニという語は個我のことである。一切が生じると考えて，ソーマという語は根本原質のことである。同様に，「かのブラフマンが対立物をもたない所，ソーマがアグニと共にいる所，賢者は，(ブラフマン) となって (?) 生き物を保持しつつ，常にそこに入るのである」とアヌギーターに言われている。この「所」(yatra) とは、心臓のことを言っている。この世の一切は気息ある者より生じたアグニとソーマである，と見る者とは，根本原質とプルシャからなると考える者とは，ということである)

[88] na ca saṃspṛśyte bhāvair adbhutair　Ca. adbhutair bhāvaiḥ sukhaduḥkhādibhir utkarṣāpakarṣalakṣaṇaiḥ / (adbhuta とは，快と苦によって増大減少するという特徴をもつ)　Cs. āścaryarūpapadārthadarśane yo na vikriyate / (不思議な形や物を見ても動じない者は，という意味である)

[89] P.,D.: śālayaś ca kadannaṃ ca　K. śālyannaṃ ca kadannaṃ ca

[90] anupaśyati　Cp. sarvasya bhautikatvāviśeṣād utkarṣāpakarṣau kutastyāv iti yaḥ paśyati / (一切は元素所成という点で差異なき故，(資産の?) 増加と減少はどうして生じることがあろうか，と観察する人は，という意味である)

[91] bhaya-udvegau　Ganguli: who is unchanged under fear and anxiety　Deussen: Furcht und [freudige] Erregung　bhaya と udvega は対立概念として捉えられるのか。

[92] doṣāṇāṃ　Cs. doṣāṇāṃ, vātapittaśleṣmaṇām / (doṣa，ヴァータ，ピッタ，シュレーシュマンの三要素のことである)

(40) 時が経つと，男の能力は損なわれ，視力はなくなり，そして耳は聞こえず，呼吸は弱くなると見る者は，解脱している。

(41) 聖仙，神々，そしてアスラもまた，この世界から他の世界に去ったと見る者は，解脱している。

(42) 様々の威厳をそなえた地上の主たちは，何千人となく，大地を捨てた後に[93]去ったと知るならば，その者は解脱している。

(43) この世では，富は得るに難く，苦は得るに易く，家族の維持には (kuṭumbhārthe) 苦がある，と見る者は，解脱している。

(44) 子孫の不徳，そして徳なき人を，この世で何度となく見るならば (paśyan)，誰が解脱を貴ばないことがあろうか。

(45) 聖典によって，そして世間の経験によって (lokāt) 悟り，人間に関することすべてを実体なきもののごとく (asāram iva) 見る者は，まさしく完全に解脱している。

(46) このように私の言葉を聞いた後，汝の意識が揺るがないならば，家長期であっても[94]，もしくは解脱期であっても，汝は解脱した者のごとく振る舞うべし。

(47) 彼の王は，彼の (アリシュタネーミ仙の) 言葉を正しく聞いて，解脱より生じたもろもろの徳をそなえ，家臣を守ったということである。

---

[93]tyaktvā iti　sandhi irregular (d 句の始まりの語 (iti) に対して sandhi 規則を適用していない)
[94]P.,D.: gārhasthye　K. gārhasthyād

(2010年10月19日　受付)
(2010年11月25日　受理)